



民家分量記

四

再板



百姓分量記序四

野州後學常盤貞尚演

百姓分量博ん并増と改地法務

百姓一ノ量少くとも之を命多福之を命之とせし

けふを物之教もたす久し始に之りとも夫とく

百姓ハ地ノ配南にく野ニ物たるも法法法

ハ不悉してを不才にんハそ子に也増ぬの座

と具へて道バ不仁不義ハ不也教と意と多

さハ所あり和ほく今乃世ハ老がらうと

和あり法法とん習らうと勤ハ和此

く、困む業成味にもりし人三本の十八巻
箕利くひ毒脾胃ふお熱北飽食了り以上北
元氣虚して無きお換り配劑を布うと四細
此肉挽り時神てほゆとるし果く膏乃病法
見付又乃乃味に候物と加へ海世の文武火
て契し用り時ハ治きたと事事

村く生もてあ町北人物あじつは養人の早
りもたらん早うとど町人ハ人物ももたれ
うて判りさるゆらん紙一契結し生もて

富者北後長じつと回し鳥をまことと鶴や
馬ハふる里とを花野雜片庭の内り
鶴が鶴はまらとてたふらんやや終社雁
うれば沈龜と老んごはくろく一とま
候し意その文字知立秋給休朝吐味茶御
秋鞠まじりま北お穿懸るを不極して
ハ枯利を成ごう一美をけあゆふまハ流
藤と穿ふ台像とろく一又子御一と文作
ハ生由織郷談とやるハ下序ゆへに

のくはけいしほすしてゆくまをくはひのん物か
 してはゆきバ町切地付或ハ樹外どほく四比也
 舞ねあまハ雜拔ううううううと一葉をら夜抜
 脇若と樹うううう樹の事とハたな色つとま樹
 のんが方く一入添つとま作と舞しほまを樹を
 愛拂てつるまハ樹のゆからりまハ人拓忽く
 ぬくううと樹ゆしてを忽と形成してを百姓ハ
 百姓形ハ様くてをん賢をまハ位何人あま
 上くうと樹あひんゆむ樹ゆきどして人拓

仕上るる少ハ泥龜北地赤臨はくりをこ
 松ハ松竹ハ竹武士ハ武士僧ハ僧何人百姓及
 町人百姓うううう人うう一近奉ハ鶴北朝時む
 て武士体形ていらと射るゆ地教寺一門と樹
 作名まゆゆ一知有して樹がを容易海はう
 雜用此るう一田代法部一割無をむねとる
 らも今今作と矢いこう一何房と一ゆ金不軍軍
 の不拓子たううとととハ柳思りと臨を先を先
 とうがして起居とまひ一何房と友好ハわく是

ふふ養は叶として波一いつくは有る
ひよさるるを十人の九人の仕度して始り物と仕合
に因國さるる又八百姓はく兼任なる竹倉計
兼供一けぬおまを養一と武家比勤一常度
して好い物とく像とくさるる物一立脚者志を
わきど然とくあふははらぶそ尾たるるを
武家ねいハ心て貴ひし又兼勤つるをハ終四
幸提川善清等の信員一然も初とく作詞
とゆまはとも耳よ喰つといはとをうね物と海

一信務の金巻ひとをり一負あく欠落ふ
ほあ響居とるる有古歌一ふくハは
のけや志れどあう一とらう一書その下を
さし秋のふハとく兼果け一はかり一
甘を煮一くあぶとく毛もを煮一ふく又と
が煮くたるべ一とく毛ハを湯煮く此れ
と起とふと心ゆめ戒と秋一
村換吸並不和此基消探多が讓
一八一和と肩目とに中一歌歌と離も親味

の善ふたぐ細米と出くし倍と夢どど
 乙位とそんじ耕作は勤まのハヤ内ど
 乙父の節法助養へる代懐理屈と倍
 べ一親ハ理屈と出て子代地子子代理屈と立
 て親代中りこま支ぬり親朋友と理屈と立
 て猪ん肩じと神々角つる代地つる親代
 鬼おんるの親ハ慈と教へ子ハ親代親代
 孝行りつと代ハ支ぬり親朋友と懐
 つと倍忠と倍とて一和と人つるハ理屈と倍

幸とそく耕耘力代と念ど五穀貢つと物入と女
 もハ貧乏をゆと卵と卵と内樂一く見と倍
 百姓とつと村代つ和とそんと和とつと先
 主とそそと百姓一和とそつと美田之倍
 代ハ一和と倍とつと吹襲一和と倍と倍
 代ハ一和と倍と子孫繁昌とつと物と村と平百姓
 の多倍とつと倍と又系倍とつと倍と倍と倍と倍
 と感倍と倍と倍と倍と倍と倍と倍と倍と倍と倍
 倍と倍と倍と倍と倍と倍と倍と倍と倍と倍と倍

治ぬ物之月信智なる奴ハ有様とらゆりに
 多。あまふ有く為一己權とそんぞ様子
 又と治とま入好たる分別自悟のりと坊の人
 ととる出此を好くもるハ奴等ハ仕業と見え
 かりて取て治もハ商人とあり難とてる後此
 如く事治物之故ハ若様徒當ハと下此刑符
 忽ちと村に因新乃根ハ出入治ぬと治後
 一て夜と急つと情実ある家下支死人此物一
 け治乱事たもと六味よととるに後人

の成ふ時入札をせり方由と書辭と陳書に
 とも密書と信據と一とされつと正並行て今後
 實抄して今もとも並書あり具員たると
 別方々奢り治物上乃余と之有頼と一業
 有と業とく備をたると大治ぬとの成ふ
 く無能此倫とく大取乞ホととるに
 て乞取とくを稀をら事ととるハ
 徳を成へ一と正並無些一分別實抄ハ此心也
 結て強氣と理をこり依佐多業と急

て酒多し満ち懐弱にて世のぬき木ハ一つと
 てを村坊の物と見れば人自肯及り人
 酒屋ハ永代此處にと爰に高野田畑稼人
 所見れば所々我候に控へたるもの
 と候をよきと見れば礼をさふ見れば
 至身候しは度此出入り候はば梅も
 と侮ふも好悪ありとて又候よきと見れば
 あり候もまた此候に候はば大抵候
 あり候もまた此候に候はば大抵候

生もこれ印親は子と我若くて死は事
 つた見の意地ハ地獄をいふ人さにてさ
 とハむごたれさるる方候に候はば眼
 づくと懐く気もこぼれ候はば
 るハ志くも父子夫婦朋友此理屋をい
 くし見れば朝儀中いふを世が朝儀見
 して海を起すと又志く候はば
 朝儀の我と不便とあり候はば
 の費をよきハ田畑ハとて爰に林ハ

かゝる水...と云ふ人...
多量に存く...
つゝ見せ...
が...
むか...
て...
乞...
一旦...
し...

又...
力...
一...
了...
見...
祖...
原...
方...

お百姓の多様な情

多様な情は保身ありを以て... 持来令の聲と取已の情... 一にそれらを以て... 今一は其の事... 亦我一旦責持る... 方及西... 以之は... 作之...

痛く暮るる... 感じ多し... 衆人の中には... 中... 不... と思...

村... 事... 代官...

村々梅凍のりる上八國の政何く十八村支
 配人の仕並置しん人少く早換可換ハ上りり
 人へて云波盤くをま作の時を如く兼貢
 と強くとして困窮するハ其主此答にわ
 と敷場御痛ふてはく業とまつて困窮するハ
 仕並置不足と有て先加と正しく取異ん然
 後此成程のりる多てはまて又かまの不
 仕合はく困窮するハ村中かつてを換わ
 難へてはもあつて富をばく思ふれれが寄進

多にハ多とてはく必を費しあつて一人とを
 漸く事するにハ此極多る難く子孫之の
 毛とふれれは法をたふま去は恤じ大哀
 大慈にやハ何迄
 村々を賑ふるも何かに換わら其美し一
 此海にまハ人少く波盤と初るは初ての上毛
 此をうた用を初人ハ安利益或ハ利がはも
 倍てま人のまん事と候は毛ハ者く徳又換る
 此ハ善向くくは毛此也一初て人と街田畑と換

全保く思ひ自由令信り多利に利と如の所
 ことごとくしてや。さ所此族わむハを村とを因
 窮ささる物ぞ想と毒ハ控らるをむは其来
 とを枯ううういそ一旦ハ富を失必も孫よ
 物々率りて免むてうハ免さるも亦多
 非秋の水のせか突んを評候とせそのは
 由さるむ代友取て押し給う一人と行て
 新氏と脚ううの法やぐ一村よるるの秋歌を
 為の素裏まの理知にたる所権好任候して

下人候て世の好名中排子の作は有る
 けしき物ハ物藏並忠者醫を蔵人乃承く
 小使の影末がと所一此代友と事乃て此上
 下の便豆一乞に善悪何れと先着いと所衣業
 と勤の世ハ時と得ど懈怠此弊か乞乞年
 貢徴如くと收納運送此滞か一村此人情候知
 少人善悪隠さると備ぬ少人内談を調ひ多之
 ららハは年を志仰り親親り少人月俸月俸境
 候所食意の高津代者信と申入おわうとさ

乃たを又やうにくぢの心ハ和らふ物なれば
 く又けりき代受ハ權とて威と強撫式と立
 在禮と怒を主守門の儀云々然く表向ハ敢てや
 する事た月夜にくハ衆一衆恨懐と令久く
 度と強是百姓新ハ夜夜取与も平百姓
 一衆代受而目外はま本懐の江戸種と出
 夫々ハ乞乞と重くぞとて人と尤勿量とハ
 終つて高一威と好古作を志とて其る民
 の情とく中一むるが政なりと民は情の離る

やうにして豈治んやと其民と治るハ
 水と流るハ流る水ハ不燃と燃
 と相悦と又事して歎の言をそとやに
 この如く民ハ無常相如と不燃治と其救
 けひの境と學園に水ハ不播とく百姓の
 と不充とちと己可かとて春をこうし
 不燃と燃と其ハ其さうハ境をく水と傷
 んとするも是危一其陰種と行ひ自揮と其
 も其ひひ代受後子と其と其やうに治

公儀の所政は心遣ふは後とて下とてあ
 上成るるは勿俾る事幸と世記もバと目めく
 お様はく存もせんやばい思大辨の事はくハ
 わい多言の事ハ正直なりとて併親子
 兄弟朋友の身は所分ハ大悪し思ハ事所人
 ハるるは存ハ常に矢見と加ハ給養は給ハ
 かりに勤るるは比以の所思と報せし
 幸と思の辨並秋の二休所齊の異子
 幸く慮る時ハ所近き憂うにのそと下國

をを信はく一とあるは辨のつと信をれは
 一とあるは慮る時ハ決りまはし由の由を
 せとて近き憂い謀るをくあるは必し
 とてとて一とあるは所もハるるは
 と慮るは日月と事と油と難くかくんめ
 に相決つてて事幸か事幸に事幸
 一と初は心す痛心す決りまはし
 どのを慮るは事ハ一と事と事と事
 又事ハ慮るは事無三羊書非國書りて改

の月にゆゑに氏依救への系のを救ひ流る所の
 文依そのい救ひ言ふと相續とてて令依書又軍
 船北書而所の士のをを救ひ夜定すとハ書其書と
 無くといハ出奉とて其まじ唯高乃を書よ北
 令依徳とて依徳依務ぐ玉縁にまるとハ之取
 救へ天といふといもをを救ひ唯忠ハをを
 一つわくをを忠ハ唯忠ハありとて入く先唯忠
 て忠色ハもよと忠と救よ下まじ不美ハ偏と
 唯忠をを忠とて忠忠まもよハ忠忠あり忠と

改て逐ぶ一を忠と改てを疎消と改て
 忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と
 外ハ忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と
 忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と
 一忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と
 外と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と
 何と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と
 人を忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と忠と
 利して利色しる偶人七情此思

入はく死にくこの傷けりや利後なる如
 今人歎た著かるる人の死に組の地獄人歎
 何き後有るを見ても何れなるよい狂らば
 其もよバも人の歎とかいゆらて却る歎とんを
 若くやとま由縁りもを空にさ異さば成はく
 是つと食後らさるる後く、漢もバ是つと
 心もたれぬと後にくはる縁りよて居る
 了つて人知よ竹をる来んはけはあつたゆい
 香をた食里光陰の甲ととささるるよ

屋こよ心指おふ是る事とあつたるんハ新入
 を求る事とさうゆふハ性秋情秋の心を
 性秋ハ私に和後と後秋のるはるる時を
 福はゆつて竹事を因し事たをを新之情
 秋ハゆつた心秋ハゆつた心秋ハゆつた心
 心秋園ののさかど秋もて情嘆くをと情
 心ハ秋は遊くさうゆふハ人を取後取
 心ハ秋は遊くさうゆふハ人を取後取
 心ハ秋は遊くさうゆふハ人を取後取
 心ハ秋は遊くさうゆふハ人を取後取

ふふひひんごも淫世をまじへん歌の内へ
えろく齊北國の皇子とて大后あり君りか
惟と揚つてまゝとて思く辭遣して侍りまほし
事統へ成人疎て曰えり揚まの宮ありて
中が縁まゝ伝へてさるはくそが教へて後物
了道途たは中縁たるは法多て候て歌と
去りてさるさるのひらもて皇子の養へ我ハ歌
と知るゆゑか傳と傳をもて我ハ我今時今
て政の目とてた子孫の今人のことを案するに

わつとて人倫を疎く滅とててあつて笑く
たろべへ今我倫物と知て智也たつたそのゆ
若じつとゆとて私安かて中縁譲りて
あつとてゆとて大縁とてて子孫とてんすの
小縁は保て中縁と譲んハ竹まは歌とてうふ
づとてとてさるさるの毫に親者として
我志子の書りゆりて我が代ありんは信をん
と訪備て親たのて善かくする用をの信を
ゆじんわん人を今我倫譲りては信の性

して執意保くんとす免置何事ぞぞ 御伏
とて無人あり又そのとせは地もさぞぞとく
んは若くはく坊のありは初ハ兼意
その由美事してして陰で疎のすよるぞ

飛渡りて

とて一普の事述とらひ一人作ら後打
くるがわく普の先へ電のさうりる伏初
務はもそ拂ひらるが後ハ後す人
府内内伏述内りりるぞとて公生た

たる公事い温わくをせとて後申にて謝
責といふ人よるく免とせとせたる事
意とて後若くは公時の人感じらるぞ
地色ハ地色ハ御りよあり申疑ふ事

我比辨並道と改る屋宇此事有
盗難者有 諸人への網

意とて情の強さ申はくはあ 吾我を
我勤とて休らるを御月ハ意くして事
人しく思ふんと御りる後比事云破

と士の私の言をよみ果すとて致すの程も
 存存と之程家媚福して其の心法存を
 致すや其の存る様々の表く致す家
 ころとて表びあけたるも其見負一表味
 表とばうも世大悔むに致すもして其の
 しころとて其の表の存の表の存の存を
 折ぐ一存の表の存の存の存の存の存を
 あく人々致すも其の存の存の存の存を
 変ぜ一存の存の存の存の存の存の存を

首の存たる存の存の存の存の存の存を
 ふむるもして其の存の存の存の存を
 今世を以て今世来も其の存の存の存を
 其の存の存の存の存の存の存の存を
 少くも又其の存の存の存の存の存を
 一存の存の存の存の存の存の存の存を
 ハ其の存の存の存の存の存の存の存を
 とハ表裏一存の存の存の存の存の存を
 に其の存の存の存の存の存の存の存を

終て形代形了大事にぬぶる強を年ゆり
 ずて出るるハ電くやちぞの及ふ事には
 出つともハ出極の陥改まハ強弱とも
 ぞんト、一きざらぬハ果さともほしと
 ぬらとやハせらぬハ物相し人々ハ病
 不本ハ無へても不香令は傷ハ全
 合入ても貴教と兼らるる事ハ浮世
 不本ハ十里のろと九里ハ或ハ人の門
 先ハ教と教すふりハ建ハ迎ハ十ハ物九

と道あハ迷ハ改ビ
 去むにぬぐ難と盗じまあり友を極く
 此色ハとも茶に美実此は忘れ去あ
 強ハ一ハ止アそそ教盗ハ初オ
 ころハゆりともぬら大極極極の
 かし又ハまらんむをもた男ハつ
 いらまぬよハまあり喰ハそま
 有るハ多ハいらさむとも
 小事ハゆりともぬら大極極極の

して留りたる生る方大よ遠つて居るは
 有る未だ此佛の縁に縁あるは南に此佛の縁に縁あるは
 悟ん此の起るは佛をうとて縁あるは縁あるは縁あるは
 是は縁の起るは佛をうとて縁あるは縁あるは縁あるは
 之不改去の存人と殺し事あるは善或人盗しわい
 毀るは縁の起るは佛をうとて縁あるは縁あるは縁あるは
 害ふといはわい事あるは善或人盗しわい
 ては縁の起るは佛をうとて縁あるは縁あるは縁あるは
 分量記卷四之終

是
 東


